熊本大学教育学部紀要，人文科学
第49号，269－283，2000

形態論と語用論

西　川　盛　雄

Morphology and Pragmatics

Morio NISHIKAWA

(Received September 1, 2000)

The present research aims at exploring the interrelationship between morphology and pragmatics in terms of the cognitive-operational perspective of linguistics. Some kinds of suffixes undertake the influence of pragmatic factors of politeness or honorifics, including the morphological forms of diminutives, argumentatives, and depreciation (quasi-diminutives). They are characterized by extra-grammatical morphology rather than grammatical and structural morphology. The term "extra-grammatical" morphology stands for "pragmatic" or "cognitive-operational" morphology which is realized in the actual use of language. Here works the interaction between language structure and a number of principles of language use. We first discussed the pragmatic cases of politeness in English and Japanese. We further discussed the variety of the cases of the Luchuan Language, Shona, Italian, Polynesian, Polish, Hungarian, and the Australian English. We put our explanatory focus on the morphological process of affixation in terms of the socio-cultural concepts of respect, contempt, and familiality, which are exemplified by affixes such as politeness word endings, diminutives, and argumentatives. Then our research shows that morphology and pragmatics are interactive in that the morphological forms of politeness or impoliteness are largely under the influence of pragmatic or socio-cultural factors between a speaker and a hearer. It is also a reflection of the speaker's attitude to his/her speech event.

Key words : morphology　pragmatics　suffix　argumentatives　dimunitives

(1) はじめに

Kiefer（1998）が言語学における形態論と語用論の相補的相関関係についての研究領域を形態語用論（morphopragmatics）という言い方をして，語形成における発話場面の果たす役割の重要性を指摘していることは傾聴に値する．一見構造論的形態論における接辞形成とその対極にあると考えられる語用論とが統語論や意味論を越えてそれほど密接な関係があるとは思えないかもしれないがけっしてそうではない．実際には話し手と聞き手との社会・文化的な人間関係のあり方の心理的反映としての言語形式がコミュニケーションの成功のためには思いの他大きな役割を果たしているのである．むしろ人間関係をスムーズに機能させるためにある種の言語形式はspeech eventにおける話し手と聞き手との人間関係のあり方の指標あるいはマーカーとしての役割を担っているのである．この言語形式のひとつに接辞がある．

ここで言う語用論とはコミュニケーションの場における話し手と聞き手の心理的距離を調節するための言語学的手段の操作的反映として考えておきたい。定義としてはLevinson（1983：9）の言う以下の定義を参考にしておきたい。

(1) Pragmatics is the study of those relations between language and context that are grammaticalized, or encoded in the structure of a language.（語用論とは言語と文脈との間にある関係についての研究であるが，その関係は文法化されているか，もしくは言語の構造の中に符号化され

ているのである.)

この定義との関係で想起される典型的な例としては語用論における丁寧表現（politeness）の問題がある．これは話し手が聞き手に対してもつ社会的かつ心理的な配慮（care）のあり方，つまり人と人との言語による心理的距離の取り方の反映である．このことはR. Lakoff（1975：65）に従って

(2) a. Formality : keep aloof
b. Deference : give options
c. Camaraderie : show sympathy

の3つの分類に深く関わっている．後にみるように（2c）に関わって親愛の気持ちを表す指小辞（diminutives）やその逆の誇張気味の意味を表す誇張辞（argumentatives）の果たす役割は大きい．

しかしこの問題は身近な英語や日本語に関わるだけでなく世界のさまざまな言語においてニュアンスの違いこそあれ，接辞形成の操作的かつ語用論的問題として興味深いものがある．

人と人との関係は多様である．しかし概ね親と子，先生と園児・生徒あるいは学生，職場における上司と部下，病院における医師と患者，学校における先輩後輩の関係などでは概ね後者から前者に向かっては丁寧表現を用いることが多い．また前者から後者へは親しみや信頼関係を前提に親愛表現を用いる場合が多い．恋人同志や同級生などのお互いに対等な場合はぞんざい表現もまた親密さの証明となる場合もある．このようなさまざまな発話の現場で話し手が語／文をどう操作し，それが話し手自らと聞き手に対してどのような社会的・文化的結果を招来するかということは言語学の領域においても重要な視点である．

本稿に一貫する立場は言語の使用場面を前提とした操作主義的言語観である．言語能力の生物学的あるいは生理学的基盤は，確かにある．しかしその基盤の中身を解明する作業は現時点ではDNAの遺伝情報についてのメカニズムや大脳皮質の言語野の解明を待たなければならないであろう．そしてその解明作業は分子生物学あるいは生理学に特化した領域であるだろう．言語学者はあくまでも言語の構造的，認知的あるいは使用場面における操作主義的側面の解明に焦点を合わすことが期待される．ただし学際的な視点において両者を互いに切り離して考えることはできないということはいうまでもない．

この世に生を受けた幼児は生まれ落ちた土地あるいは言語・文化圏で用いられている個別言語をまずは母国語として獲得していく．その過程は経験を基盤とした類推能力と修正能力に依っている。つまり周囲の世界（人や事態）に関わり，自らの生存と生活の必要性において語を模索・獲得し，これを豊かにし，さらに思考の枠組みとしての「文法」をより確かなものにし，加えて丁寧表現や親愛表現のような使用場面における認知論的あるいは操作主義的原理を身につけていく過程なのである．

形態論的研究はこれまでは概ね語の構造論的側面に焦点が当てられてきている．本稿ではさらにこれに加えて語形成上の認知論的かつ操作主義的側面にも焦点を当てていきたいと思う．語や文法は個としてまた種としての人間が人間として生き残っていくための道具としてこれを操作的に用いる．そしてこのことを通して言葉のやり取り（コミュニケーション）を果たしていくのである．その際話し手と聞き手の人間関係，さらに両者が関わる発話場面や話題となる対象の捉え

方も語形成のプロセスに大きな影響を与えているのである．

具体的にはさまざまな言語で愛称や卑下の言葉を引き受ける名詞の派生接尾辞，会話当事者たちの敬意あるいは不敬意を表す動詞の派生接尾辞，あるいはまったく別の語を用いて敬意あるいは不敬意を表すのである．本稿では身近な英語・日本語に加えて琉球語，イタリア語，ハンガリー語，ポリネシア語，ポーランド語，南アフリカ（ジンバブウェ）のショウナ語，などの例に触れながら形態論における派生接尾辞が認知的かつ操作主義的にどのような諸相をもっているかについて少しでも考察を加えていってみたいと思う．

(2) 認知能力と操作主義的言語観

生命体である人間はこの世に社会的存在として生を受けてから後，個としてあるいは種としての生存を持続することが要求される．このことを可能にするものは人間の社会的存在を可能にしてくれるコミュニケーション能力に他ならない．人間はこのコミュニケーション能力を駆使することによって共同生活を営み，文化的な営みを保持していくことができるのである．言うまでもなくこのコミュニケーション能力には言語的（verbal）と非言語的（non-verbal）なものがあるが，ここでは本稿の性格からいって前者に限ることになる．

人間の言語能力（language faculty）は生理的には大脳皮質部の言語野から運動神経あるいは感覚神経を経て発声器官全体に基礎づけられているが，具体的には記号としてのシンボルの獲得とその妥当（relevant）な操作的使用によって実現される．それはすなわち言語を用いる発話者が周囲の世界をどのように見ているか，あるいは切り取っているかという認知的側面と同時に，伝達の手段としての操作的，語用論的側面にも深く関わっている．相手によって使い分ける言語学的方略（linguistic strategy）は話者の属する社会・文化的背景が聞き手や話題との関係で操作的に反映されているのである．例えば，日本語では「行く」を「参る」と言い，「言う」を「仰る」と言い，「あります」が「ございます」という丁寧表現や，「太郎」という固有名詞に対して「太郎・殿」「太郎・様」「太郎・君」「太郎・ちゃん」「太郎・め」という敬意あるいは不敬意を表す接尾辞を付けた言い方等は会話当事者の人間関係のあり方を反映して興味深いものがある．言語によっては二人称単数の呼び方に二種類ある．フランス語やスペイン語では相手のことを呼称するに際して親しみの度合いに応じてそれぞれ *Vous* と *Tu*，*Usted* と *Tú* のように使い分け，前者の方に敬意あるいは丁寧さが込められていることはよく知られている．下宮（1979:260）によれば，バスク語の場合では二人称は元来単数形が *hi*，複数形が *zu* であったが，この複数形がもっぱら敬称表現として用いられるようになり，その結果として新しい二人称複数形 *zuek* が新たに作られるに至ったのである．

言語はその認知的側面においても，伝達的側面においても記号（シンボル）を用いるという点において操作主義的なものである．言語の認知論的側面においては，話者の周囲の世界についてのメンタルなプロセスに形式が与えられたものが言語表現であるという点において記号操作の問題が関与している．シンボルとしての記号がなければ人間は認識を整序し，感情や思考を方向づけることはむつかしい．さらに人間は思考を論理あるいは推論というかたちで秩序立てることを可能にする大脳皮質という生物学的，生理学的部位をもっている．言語は音声化されたものであっても文字化されたものであっても経験を通して記憶の痕跡としての「知」が獲得され，内在化された語や文法体系を実際の場面で活用しながら，認知・操作的に記号化されるものなのであ

る．

他方，具体的なコミュニケーションの場においては相手によって言い方を変えることによって話し手と聞き手の社会・文化的な人間関係のあり方が反映される。その意味で言語は伝達の手段である．丁寧表現（politeness）や敬語表現（honorifics）などに加えて意味論的含意（implicature）を前提にした間接表現（indirect expression）の効果などがその例であるが，形態論的な派生接辞にもこれが見られる．英語の場合，*John* に対して *Johnny/Johnnie*，*Victoria* に対して *Vicky/Vickie* となれば親密度が深まり派生接尾辞である *-y/-ie* は親愛の情と小ささ，可愛さの社会・心理的意味合いを帯びてくる．そしてこれを相手によって使い分けるのである．ここには話者の心理的態度を派生接辞に乗せてどのように表すかという認知・操作主義的な視点がはたらいているのである。

人間の生物学的な基盤にもとづく言語能力（language faculty）の生得性という考えは Chomsky や Pinker（1994，1997）らの指摘してきている通り，現在ではよく知られた仮説であるが，生物学的な基盤を「普遍」としてこれを追求する場合，遺伝子レベルの問題か，せいぜい進化論的発想を基盤にした分子遺伝学的，生態学的な説明に帰着する．例えば，新生児が生まれながらにもっている普遍的な言語能力は端的に言えば，人間が他の動物たちに比して特に発達している大脳皮質に依拠しているといえよう．特に左前頭葉のブローカの言語野（Broca's field）と左側頭葉のウェルニッケの言語野（Wernicke's field），さらにこの両者を奥深いところで繋げている伝導性神経回路の存在とその機能はきわめて重要である．そしてこれらは人間に固有の生得的，生理学的な能力（competence）を保証するものとして人間という種に特徴的なものであると主張するのである．

とはいうものの，言語はむしろ，あくまでも J. ピアジェ，あるいは新カント派哲学者 E. カッシーラーや S. ランガーなどの言う意味での象徴機能を果たすシンボルであると考える方がより現実的な見方であるといえる．さらに C. パースに従って，言語はシンボルとしての記号の一種である限り，人間にとってはこれを社会・文化的な場面によって使い分け，実際に使う（use）という発話場面においては顕著に認知・操作的なものであるといえるのである．

シンボルとしての記号（語）は社会・文化的なものとして一定の文法ルールにもとづいて組み合わされ，その組み合わせの多様性においてある時ある場所での発話としての「創造」が可能になる．この種の記号が操作的に組み合わされるためには，その前提として知識の体系（the system of knowlegde）としての語や文法ルールが経験にもとづく学習と類推と修正によって大脳の中に記憶され，内在化されていなければならないのである．

歴史的・通時的にも言語のもつ構造や意味は徐々にではあるが変化しており，文法化現象（grammaticalization）にみるように語の意味や品詞も実際の発話の場における使用（use）を通して拡張されたり，変容を受けたり，消滅したりしていく．言語についての経験科学の妥当性は個別言語の具体的な言語事実に基づく仮説の説明的妥当性によって決定される以上，言語が理念としてあり，全ての個別言語から抽象化され，「普遍」的にかつ生得的に理念として「存在」しているとするなら，それはもはや K. ポパーのいう反証可能性（falsifiability）をもたず，すでに経験科学としての資格をもたなくなってしまう危険性がある．

言語はその使用（use）にあたっては経験と類推によって獲得・内在化された言語知識（the knowledge of language）の果たす役割は大きい．問題はこれをいかに操作的に使用してコミュニケーションを成功させるかということは看過することのできぬ問題である。ここでは話者の意図が話されている発話内容を通して聞き手に伝えられ，聞き手はこれを推論によって話し手の意図

されているところへの理解にたどりついていくのである．このとき考慮（compute）されているのは話し手，聞き手の社会・文化的意味合いをもつ人間関係の心理的影響と発話の場（状況）から与えられる情報（知識）である．この情報（知識）が形態論にも少なからぬ影響を与えているのである．

(3) 派生接辞の語用論

語形成における屈折（inflection）は動詞の時制（tense）や名詞の数（number）や格（case），さらに形容詞の比較級、最上級の語尾のように他の語との関係でその語尾形態が決定されてくるという点で統語論に属する面が高いが，語形成における接頭辞や接尾辞などの接辞派生（derivation）はモジュール的に語形成過程を語自体の中で終始する形態論の領域に属する．派生語尾は屈折語尾と違って語幹の品詞を変えたり，語幹の意味を大きく変える機能をもっている．意味を大きく変える機能としては英語では *un-*，*dis-*，*in-*，*de-*, *-less* のように語幹の意味を否定したり，逆転したり，解体したりする事例があるが, *-y/-ie* のように発話者が聞き手に対してどのような社会・心理的態度で関わっているかを証し出す方法として好意あるいは愛称（親密性や可愛らしさ）を表す派生接尾辞が存在する．男性で *John* が *Johnny / Johnnie* となったり, *Joseph* が *Joe* を経て *Joey* になったり，女性でも *Elizabeth* は *Betsy / Betty*, *Victoria* は *Vicky / Vickie* という愛称になることはよく知られている．

発話者が聞き手に対して社会・心理的に優位性をもち，しかも好意ある親密感を抱いているときの表現に対して，逆に発話者が聞き手に対して社会・心理的に劣位性をもち，しかも好意ある親密感を抱いていないときの表現もある．例えばアフリカ，ジンバブウェのショーナ語では動詞の後ろに *-wo* という接尾辞を付けることによって敬意（respect）あるいは丁寧さ（politeness）を表す．例えば Ndipe-*wo* Kiyi.（Please give me the key.）のような例である．Jespersen（1922：180）は“Very frequently mothers and nurses talk to children in diminutives.”（頻繁に母親や乳母たちは子供に指小辞を使って話しかける）と述べており，その結果として英語の場合，*bird*（元来 young bird），*rabbit*（元来 young rabbit）が *fowl*，*coney* に取って替わったとしている．また母音［i］が話者の気持ちを感覚的に表す役割を指摘して，これが小ささ（smallness），弱さ（weakness），意味の小ささ（insignificance）などを表す例として英語の指小辞 *-y*，*-ie* を取り上げ，他にドイツ語では*-li*，*-chen*，イタリア語では *-ino*，スペイン語では *-ico*, *-ito*, *-illo* などの例を取り上げている．

ドイツ語の *-chen* も相手によって指小辞として語幹の縮小概念を表すのに用いられる．よく知られた *Mädchen* の他に *Kind-Kindchen*，*Haus-Häuschen*，*Maus-Mäuschen* などの例がある．この場合も語幹に対する社会的・心理的視点が反映されており，話題となる対象や話す相手によって使い分ける傾向をもつのである．

ここで音韻論的に接辞を二種類に分けて考えた Siegel（1979）の立場に触れておきたい．Siegel は接辞を分類するのに Class I 接辞と Class II 接辞の Level Ordering Hypothesis による分け方を試みた．前者は主として発音特に強勢（stress）の位置に変化が生ずる場合，後者は変化が生じない場合である．すでに述べた英語の指小接尾辞 *-y/-ie* の場合は出来上がった語全体の強勢の変化が生じないために Class II 接辞として分類することができる．すでに Chomsky & Halle（1968）の用いた boundary の概念を用いれば，指小接尾辞は以下の表に示すように word レベルの［#］（cross-hatch）境界ではなく morpheme レベルの［+］（plus）境界を示すものと考えられる．

(3)

	Class II 接辞	
bird	bird ＋*-ie*	(English)
John	John ＋*-y* / John ＋*-ie*	(English)
Haus	Haus ＋*-chen*	(German)
hus	hus ＋*-incel*	(OE)

さらに相手によって語形式が変わってくる事例としてオランダ語がある．この言語では遂行動詞としての命令形は聞き手への心理的配慮が反映されており，被命令者が一人の場合と二人以上の場合とで形式が二つに分かれる．前者の場合は語尾に何かを付ける必要はないが，後者の場合には語根に派生接尾辞 *-t* を付け，かつ人称代名詞 *U*(you) を付けることによって以下のように敬意あるいは丁寧を表す表現になるのである．

(4) a. *Komt U* binnen, mevrouw.（お入り下さい，奥様）
b. *Neemt U* toch plaats, heren.（皆さんどうぞお掛け下さい）
c. *Ziet U* eens pa.（お父さん，ちょっとご覧なさい）

このように相手によって操作的に形式を変えることによって発話者の発話場面に対する社会・文化的そして心理的態度が表現される．このことは，一方で生物学的存在でありながら，他方で社会・文化的存在である人間の不可避的な操作主義的あるいは語用論的特徴なのである．しかもこの発話者の発話場面における社会・文化的そして心理的態度を引き受けている部分が派生接尾辞に他ならないのである．

(4) 英語の事例

語形成と発話場面との密接な関係を明らかにする領域として Kiefer (1998) のいうように形態語用論 (morphopragmatics) の存在を主張することは可能である．語用論を言語の認知･操作主義的展望 (perspective) でみるときその語用論的側面を見ていくことになる．それは語や慣用句や文の使用に関わって社会・文化的な動機づけが不可避的に関わっていることを証し出すことになる．その際，言語使用における時，場所，話し手と聞き手の人間関係，発話環境などが派生接辞などの言語形式を決定する上で重要な要因になる．さらにここには発話者の意図，目的，操作的方略が密接に絡んでいるのである．以下にさまざまな言語について形態論とその操作的使用の結果としてある語用論との関係について考察を加えていってみたい．

英語の場合，Bradley (1904：114) によれば，古英語には相手によって使い分ける親愛の態度を示す指小辞はほとんど発達していなかった，としている．当時用いられていた僅かな例のうち *-incel* を取り上げて次のような例をリストしている．

(5) a. *tunincel* ― (little town)
b. *husincel* ― (little house)
c. *scipincel* ― (small ship)

d. *stanincel* — (little stone, pebble)

しかしBradleyは，この接尾辞は中英語までは生き残らなかったと述べている．しかし中英語の時期に入ると *-y*, *-ie* が発達し，後の *doggy*, *sweetie*, *townie* などに見られるように英語の指小辞が暫時的に発達してきた．さらにOld Norseからのものとして以下に見るように *-ling* が入り，ModEに至るまで指小辞がさらに豊かになってきたのである．

(6) *kingling* *princeling* *squireling* *duckling* *nursling* *sapling*

さらに，指小接尾辞 *-kin* は元来オランダ語の *-kijn* やドイツ語の *-chen* につながる語である．これは元来同族／血族（gene）を表す単一の名詞であったが，文法化現象を起こし，内容語であった名詞が接尾辞という機能語に変質してきたのである．例としては次のようなものがある。

(7) *lambkin* *manikin* *princekin* *devilkin*

現在でもこの痕跡が人の姓（surname）によく残っている。*-kin* のもつ本来的な一族，同族を表す意味合いが生かされ，nicknameのようなかたちでMEの頃によく用いられたのである。*Wellekin*（little William）や *Jankin*（little John）などは後に人名の *Wilkins*, *Jenkins* に変化していった。Bradley（1904：115）はこれに関してつぎのような英語の例を上げている。

(8) *Atkins* *Dawkins* *Wilkins* *Jenkins* *Watkins* *Dickens*

さらに子孫を表す*-son* という接尾辞をつければつぎのような姓ができあがる。

(9) *Wilkinson* *Dickinson* *Dawkinson* *Atkinson*

英語の事例としては他につぎのような例がある。指小辞の数としてはけっして少なくない．Jespersen（1938）は，英語では他の言語に比べてそれほど種類は多くないとしてはいるが，しかし調べてみると指小辞は英語にはかなりあるように思われる．例えば以下にみるとおりである．

(10) a. -let； *booklet* *piglet* *streamlet* *leaflet* *brooklet* *ringlet* *eaglet* *cloudlet*
b. -kin； *babykin* *lambkin* *princekin* *Wellekin*（William） *Jankin*（little John）
c. -ling； *duckling* *kingling* *princeling* *nursling* *sapling*
d. -y； *daddy* *mummy* *Johnny* *Tomy* *Dicky* *teeny*
e. -ie； *doggie* *dearie* *birdie* *yuppie*
f. -ette； *kitchenette* *snackette* *diskette* *cigerette* *novellet* *usherlette* *leatherette*
g. -et； *nymphet*
h. -ule； *granule* *spherule*

Jespersen（1938:164）は指小辞における逆成（back-formation）の例を指摘している．彼は，英語の *puppy* はフランス語の *poupee* から来ているが，これは petting suffix である *-y* が語根であると考えられる語に付加されたものと思われ，ここでは新たに *pup* という語がつくり出されたと述べている．他に *cad* が *caddie* あるいは *caddy* からの逆成によって形成されたとしている．

元来 *-y, -ie* は指小接尾辞でこれを使う側はその対象に対して親しみをもって時代や社会を反映する場合がある．Katamba（1984：150）によれば新しい語には誰がつくったものであるか分からないものが多いがうまく接辞を使って造語している場合が多い，としている．例えば *yuppie* は "Young Urban Professional Person" の acronym に指小接尾辞 *-y, -ie* が付いてできあがったものであるが，これは 1940 年代から 50 年代前半にかけての都会派若手エリート層を表す言葉であったのである．

(5) 日本語の事例

まず接頭辞からみてみると *o-*，*go-*，*mi-* の対応が思い出される．これらはいずれも敬意を表すところから敬意接頭辞と呼んでおきたい。以下の例がこれを示してくれる．

(11) a. *o-kuruma* <-- *kuruma*（car）
b. *o-shasin* <-- *shasin*（photo-picture）
c. *o-kyaku* <-- *kyaku*（guest）

(12) a. *go-riyou* <-- *riyou*（to make use of）
b. *go-kurou* <-- *kurou*（labour）
c. *go-shuppatu* <-- *shuppatu*（departure）

(13) a. *mi-kurai* <-- *kurai*（social rank）
b. *mi-uta* <-- *uta*（song）
c. *mi-kotoba* <-- *kotoba*（words）

ここで敬意接頭辞 *o-*，*go-*，*mi-* はいずれも同じ「御」という漢字から来ていることは興味深い．さらに人の呼称においては中立的には *-san* があるがこれとは対比的に親愛表現には *-chan*，軽蔑表現には *-me* があることも以下の（14）（15）に記しておきたい．

(14) a. *Taro* -- *Taro-chan*
b. *Tama* -- *Tama-chan*

(15) a. *Taro* -- *Taro-me*
b. *seijiya* -- *seijiya-me*

ここで（14a）の場合は人，（14b）の場合はペットの場合の愛称，（15a）（15b）は何がしかの軽蔑の意味を含んだ言い方である．

他には動詞の命令形についての敬意表現がある．例えば「読め／走れ」の丁寧表現は「読みなさい／走りなさい」である．「－なさい」は「な（為）す」の敬意表現「な（為）さる」の命令表現である「－なされ」が「－なさい」に音変化したものである．これは動詞「な（為）す」の一部であるというよりもすでに命令形を形成する敬意接尾辞として考えることができる．「－なさいませ」は丁寧表現「－ます」が付いてさらに丁寧の度合いが増したものと考えられる．

本来「与える」(give) の意味をもつ「－くれる」が「－くださる」となって敬意接尾辞が成立する場合がある．例えば「行ってくれる」が「行ってくださる」となったときには「行く」という行為を与えて「くれる（くださる)」ことを前提に，そこには丁寧表現が成立しているのである．同義の「たまわる」も「受け－たまわる」となれば丁寧さの度合いが高まり，文法化 (grammaticalization) が生じて来て敬意接尾辞としての機能を果たすようになると考えられる．さらに日本語では敬意接尾辞ではないが，同じ意味内容を敬意を込めた別の言い方があることは注目しておいてよい．「行く」に対して「参る」,「死ぬ」に対して「隠れる」,「する」に対して「為さる」などがある．

(6) 他の事例

語用論を言語の機能的視点／展望でみるときその操作的側面を見ていくことになるが，上述の英語や日本語に加えて世界の他の言語をみていけばその様相はさらに複雑であることが分かる．名詞の接尾辞の働きに加えて動詞の語尾も相手によって使い分けられている．その際，言語使用における時，場所，話し手と聞き手の人間関係，発話環境など社会・文化的要因が言語形式を決定する重要な要因になる．以下にさまざまな言語について形態論とその操作的使用の結果としてある語用論との関係について考察を加えていってみたい．

6．1　琉球語

狩俣（1999）は「琉球語の最小単位は村落共同体である」と言い，「琉球語は社会や家庭のなかで無意識，無自覚に習得されていた」と言っている．彼によれば，今では主格の格付与詞は日本語の影響で *-ga* が用いられるが主語が人以外のときは *-nu* であった。主語が人（[+human]）であるか人以外（[-human]）であるかによって主格の格付与詞が異なっていたというのである．

ラフカディオ・ハーンの友人であり，彼との往復書簡でよく知られ，明治初期の東京帝国大学の博言学の教授であった B. H. チェンバレンによる「日琉比較文典」によれば，琉球語では接頭辞と接尾辞の二つの方法で指小辞をつくることが述べられている。ひとつは以下の（16）にみられるように接頭辞 *guma-* による場合と，（17）にみられるように接尾辞 *-gwa* による場合である．

(16) a.　*mma*　（馬）　---　*guma-mma*　（子馬）
　　b.　*ishi*　（石）　---　*guma-ishi*　（小石）
　　c.　*shima*　（島）　---　*guma-shima*　（小島）

(17) a.　*mma*　（馬）　---　*mma-gwa*　（子馬）
　　b.　*ishi*　（石）　---　*ishi-gwa*　（小石）

c. *wa* (豚) --- *wa-gwa* (子豚)

前者の *guma* は komakai の koma に関連し，日本語からみて琉球語の [o]→[u]交代（または [u] による [o] の同化吸収）を考慮し，子音の無声性と有声性の [k]→[g] 交代が起これば，[ko] が [gu] に変化することは容易に想定することができる。また，*-gwa* は *-kwa* の有声化したものであり，*-kwa* は日本語の「子」に通じるものである．

これらは派生接尾辞をうまく活用した表現形式であるが，小ささ，可愛さ，親しみなど話し手の対象に対する社会的な観点が微妙に含意されている。指小辞は話者が対象に対する支配的，優越的（dominant）な視点が保持された表現形態である。話者が大人であれば子供に，話者が人間であれば，玩具やペットに対する親愛の態度は共通の心理として受け入れられ，それに応じた言語的形態が作られ，継承されていくことはむしろ自然の成りゆきである。ここに派生接尾辞付加による言語の発話場面における操作的特徴が実現されているのである．

6．2 ショーナ語

アフリカの南，ジンバブウェで話されているショーナ語は主動詞の後ろに *-i* という接尾辞を付けることによって敬意を表す．Vieth（1986：5）によれば，“If you speak to more than one person or to an adult person whom you want to address respectfully you add *-i* to the stem.”（二人以上の人，もしくは大人であって敬意をもって語りかけたいと思う人に話す場合は語幹に派生接尾辞 *-i* を付けること）と述べている．例えば以下のような例である．

(18) a. *enda* -- *endai* (Go, please！)
b. *taura* -- *taurai* (Speak, please！)
c. *pinda* -- *pindai* (Come in, please！)

形式的に普通の命令法（imperative）の場合はそれぞれ *enda, taura, pinda* でよいわけである．しかしここに相手によって接尾辞 *-i* を語幹の後ろに付けることによって（18）のように微妙に敬意のこもった表現がつくり出されてくるのである．これは年長者あるいは優位者を部族（社会）として敬うという伝統的な文化の在り様の言語的反映とも言えるわけである．

また名詞に関しては愛称の指小辞（diminutives）として *ka-* という接頭辞をつけることによって相手に対して親密さと可愛らしさと小ささを表す．ここで下にみるように，*tiyo*（chicken），*komana*（boy）について，以下のように単数の場合は *ka-*，複数の場合は *tu-* という接頭指小辞を付けるという操作的工夫がある．

(19) a. *tiyo* --- *katiyo* (polite form of chicken)
--- *tutiyo* (polite form of chickens)

b. *komana* --- *kakomana* (polite form of boy)
--- *tukomana* (polite form of boys)

ショーナ語の場合，命令法における敬意を込めた丁寧表現は動詞の後ろに接尾辞 *-wo* を付ける

ことによっても達成される.

(20) a. *Ndipewo* kiyi. (Please give me the key.)
b. *Tinzwirewo* tsitsi (Have pity upon us.)
c. Ndapota, *ingondiitiraiwo* tsiye nyoro. (Please, look on me with an eye of pity.)

また敬意を抱いている人や結婚している女性には複数にして尊敬の意を表す接尾辞 *-iwo* を付ける. Dale (1968 : 92) は以下のような例を示をしている.

(21) a. Amai, *ndipeiwo* zvokudya. (Mother, please give me some food.)
b. Baba, *ndikwidzeiwo*. (Father, please give me a lift.)

6. 3 イタリア語

イタリア語には男性名詞と女性名詞によって語尾の使い分けがあるものの, 指小辞が豊かに存在している. 以下の Kiefer (1998 : 276) に見るように男性名詞 *film* は *film-ino* であり *-ino* がつく. 女性名詞 *mano* は *man-uccia* であり, *-uccia* がつく.

(22) a. *film* (film) --> *film-ino*
b. *verm* (worm) --> *verm-etto*
c. *mano* (hand) --> *man-uccia*

さらに男性・女性, それぞれの性 (gender) を表す語尾としてイタリア語の場合は次のような接尾辞がある。

(23) a. -ino ; *ragazzino*
b. -ina ; *donnina*
c. -etto ; *giovinetto*
d. -etta ; *oretta*
e. -ello ; *asinello*
f. -ella ; *storiella*

ここでは (23a), (23c), (23e) が男性を表し, (23b), (23d), (23f) が女性を表している.
イタリア語には指小辞に対して大きさ, 実際より大きく聞こえるように意味の拡大表示を果たすいはば誇張辞 (argumentative) がある。接尾辞 *-one*, *-occio*, *-ozzo* がつけば虚構的に強調 (intensify) されるのである。例えば次のような例がある.

(24) a. *porta* (door) --> *portone*
b. *mano* (hand) --> *manone*
c. *frate* (monk) --> *fratoccio*
d. *predica* (preeching) --> *predicozzo*

この誇張辞は指小辞と違って話し手が述べるべき対象についての心理的な虚構の思い（fictiveness）を聞き手に伝える方策としてある．これはいかにもラテン系の人々にありがちないはば大げさな表現の一種と考えてよいであろう．

(25) a. Come vorrei essere nei mio *lett-ino* ?
(How I would love to be in my snug little bed ?)
b. Come vorrei essere nel mio *lett-one* ?
(How I would like to be in my big bed ?)

ここで（25a）は指小辞，（25b）は誇張辞の例であるが，*-ino* と *-one* の接尾辞対象が示唆的である．

さらに軽蔑的意味を醸す接尾辞として *-accio, -astro* がある．*libro*（本）に対して *libraccio*（駄本），*poeta*（詩人）に対して *poetastro*（へぼ詩人）があるのは興味深い．そしてこれらの言語学的手法は相手によって使い分けるという意味において操作的であるといって差し支えない。

6．4 ポーランド語

Kiefer（1998:273）によれば，ポーランド語では人間につく男性名詞の派生接尾辞は *-i, -y, -owe* の3種類がある．最初のものは中立的（neutral）で，発話場面によって語幹のもつニュアンスに大きな影響を受けるものではない．しかし *-y* の場合は，これが付くと軽蔑的（contemptuous）な意味合いを帯びてくる。ところが *-owe* の場合，これが付くと重みが増し，威厳さえ感じられるような表現になる，と説明している．面白いことに例えば，一般的に敬意をもって用いられる *profesor* や *astronom* などの語は下にみるように *-y* を付けることによって庶民のところまで降ろしてきて，人々がより親しみをもつ表現に切り替えるのである．

(26) a. *profesor*（professor） ---> *profesorzy*
b. *astronom*（astronaut） ---> *astronomy*

さらに *lobuz*（rascal）のような語はそれ自体で軽蔑的なニュアンスがあるため，neutral な意味を示す *-i* を付けて *lobz-i* となると，全体として格が上がって軽蔑性がなくなり neutral な意味合いを獲得することになる．したがって *-owe* を付けた *lobz-owe* という敬意を表す語は現実には存在しない，というのである．

この派生接尾辞の使い分けは興味深い語用論的な側面を表している。そしてここには構造論だけでは説明のつかない「場面による使い分け」という操作的特徴が実現しているのである。この側面を言語の操作主義的な視点で捉えてみると，話し手は聞き手や周囲の世界に対してどのような働きかけ方をすることによってコミュニケーションを成功させているかを示しているといえよう。

6．5 ハンガリー語

ハンガリー語では比較概念の最上級を表す派生接頭辞 *leg-* を繰り返すことによって最上級のさ

らにその上を示すのに用いられる．例えば，*nagy*（big）の場合，*nagy-obb*（bigger）は比較級である．これに *leg-* が付いて *leg-nagy-obb*（biggest）は最上級になる．ところがこの接頭辞を繰り返して *leg-es-leg-nagy-obb*（the very biggest）になれば（*es* は and の意味）最上級を越えた強調表現（excessive），あるいは誇張表現になる．この接頭辞 *leg-* は語用論的にそして相手によってまた場面によって操作的につくられ，用いられるに至ったものである．強調・誇張表現は同じ語の繰り返しによってつくり出される場合は多いが，これが接辞においても有効に働いているのである．

同様の例がドイツ語にもみられる．派生接頭辞 *aller-* の場合 *Das ist sehr schlimm.*（That is very bad.）が *Aber das allershlimmst ist, dass...*（But the very worst of all is that...）のように強調的に用いられる場合のあることも興味深い．

ハンガリー語の二人称単数命令法は言語使用における接辞の操作的側面を垣間みるのに興味深いものがある。Kiefer（1998：274）によれば，命令形を表す接尾辞には *-d* と *-jad* があり，以下に示すように，前者の短い方は強意の命令を表し，後者の長い方は少し弱められ（attenuated），かつ丁寧な命令を表すのである．

(27) a.	*ad-d*	(give；	強い命令)
	ad-jad	(give；	弱い＜丁寧な＞命令)
b.	*mond-d*	(say；	強い命令)
	mond-jad	(say；	弱い＜丁寧な＞命令)

6．6　オーストラリア英語

対象によって使い分けるという派生接辞の操作的側面からみると，オーストラリア英語には特有の疑似指小辞（pseudo-diminutives）といわれる派生接尾辞がある．これは別に depreciative とも言われるものであるが，これには概ね 3 つの特徴がある．ひとつは，必ずしも「小ささ」を表すものではないこと，第二に意味論的に内容が空虚なものでないこと，第三に，スピーチレベルにおいてやや砕けた雰囲気があり，その分親密な感情を表すものである，というものである．派生接尾辞 *-ie, -o/-oh* が独特の機能を果たす．八木（1997：51）はこのことに触れて，19 世紀末から第一次世界大戦を経て異言語，異文化に触れて芽生えてきたナショナリズムとともに，語尾に *-ie*, *-o*(*h*) の指小辞（diminutives）を付けるオーストラリア独特の造語法について触れている．彼は *schoolie*, *postie*, *trammie*, さらに *bottlo*(*h*), *milko*, *rabbito*(*h*) 等の例を示している．他には例えば *barbie* は barbecue, *mushies* は mushrooms, *pressie* は present を表し，bed は *beddo*, delegate は *delo*, business は *bizzo* になる．いずれもオーストラリア英語独特の短縮語法である．『オーストラリア英語辞典』によればこのような語法は両者とも「親しみを表す接尾辞」と記述されており，「オーストラリア英語の特徴の一つ」となっている．語幹は標準的な語，あるいは短縮形に付けたりすることによって成立するのである．以下に *-ie* と *-o*(*h*) についてのいくつかの例を示しておきたい．

(28) *umpie*（umpire）　*marjie*（marihuana）　*oldie*（old man）　*possie*（position）
sickie（sick leave）　*prawnie*（prawn fisherman）　*hostie*（air hostess）
westie（resident of western suburbs of Sydney）　*sammie*（sandwich）
soapie（soap opera）　*schoolie*（school teacher）　*rellies*（relatives）

pokie（poker machine）

(29) *beddo*（bed） *compo*（compensation） *imbo*（imbecile）
goodo(*h*)（pleasure！） *fluoro*（fluorescent colour）
dubbo（foolish country person） *delo*（delegate） *dekko*（look）
camo（camouflage） *arvo*（afternoon） *combo*（combination）
bizzo（business） *houso*（housekeeping money）

これは *-i/-ie* あるいは *-o/-oh* という限定されたものであるにしろ，発話の場が新たな派生接頭辞を形成した証拠事例として貴重なものであると言えよう．

音韻的には語幹の後ろの子音に *-y/-ie* が付くのは［p］［m］［l］［t］［s］［k］［d］［j］等であり，*-o/-oh* が付くのは［r］［v］［d］［p］［k］［b］［s］［z］［m］［r］［l］等である．また，派生語としての性格上，接尾辞には強勢（stress）は置かれないが，音節形成上減り張りのついた力強い印象を与える表現となる．

(7) まとめ

それが屈折であれ派生であれ形態論の領域も話し手と聞き手との人間関係における発話場面の影響を大きく受ける．その意味で形態論と語用論との間には互いに深い相関関係がある．話し手が聞き手に対して敬意をもったり軽蔑の心をもったりする場合，また親密さや可愛さの情を前提に親や大人が子どもに，所有者がペットに，あるいは恋人同志がお互いを呼び合う場合，さらに表現対象を強調・誇張する場合などに特定の派生接尾辞を用いることが多い．その工夫は当の発話者の発話場面における社会・文化的な原理にもとづいた妥当性あるいは連関性（relevance）を保証・保持するためにきわめて認知論的・操作的なものとなる．

この世に生を受けた人間は基本的に少なくともひとつの母国語といわれる個別言語の語や文法ルールを試行錯誤的に，段階を踏んで獲得していく．その時獲得し，同時に用いる言語とはC.パースの指摘したように，記号の一種としてのシンボルである．シンボルである限りにおいて人間はこれを操作してコミュニケーションの成功という目標を充足しようと勤めるのである．

本稿の第一章でははじめにLevinson(1983）の考えを参考にR.レイコフの丁寧表現（politeness）にはたらいている諸原理を援用しながら語用論についての概念規定を行った．第二章では言語による人間の認知能力と操作主義的言語観について概観した．人間は一方において生物・生理学的存在である．と同時に社会・文化的存在として生き残る術として言語をもっている．人間にとって言語は，ヒトという生命体として，互いのコミュニケーションを通して，個としてあるいは種として生き残っていく上で基本となる知識である．記号としての語は他の語と一定の文法ルールの下に組み合わされて，より大きな言語単位として句あるいは文を形成する．そしてそれを話者は発話の実際の場面においてこれを認知・操作的に活用するのである．その具体例として形態論における派生接辞がある．語幹の品詞や文法的機能そのものを変えることはないが，派生接辞を適格に用いることによって発話場面における発話者の聞き手に対する発話態度（discourse attitude）が操作的に反映されてくるのである．

第三章ではこのことを受けて，形態論と語用論との相互関係について派生接辞の例を示しなが

ら，相手によって使い分ける話者の言語学的方策は話者の属する語用論，したがって社会・文化的側面を反映していることについて述べた．第四章，第五章はそれぞれ英語と日本語の事例について通時的側面に配慮しながら考察した．第六章ではさらに琉球語，ショーナ語，イタリア語，ポーランド語，ハンガリー語，オーストラリア英語などについて形態論と語用論の相互関係についての考察を加えてみた．結果として本稿では，派生接辞形成においては構造論的な側面のみならず，話者の属する語用論的，つまり社会・文化的傾向から大きく影響を受けた言語使用上の認知・操作主義的な側面が重要な役割を果たしていることを少しでも明らかにしてみたわけである．

【参考文献】

Bradley, Henry. 1970. *The Making of English* (Revised Edition). London: Macmillan.

Bybee, Joan L. 1988. "Morphology as Lexical Organization" in Hammond, Michael and Michael Noonan (eds).

Chamberlain, B. Hall. 1976. *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*. (日琉語比較文典：山口栄鉄編訳). 沖縄：琉球文化社.

Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language:Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger.

Chomsky, Noam. 2000. *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dale, Desmond. 1968. *Shona Companion*. Harare: Mambo Press.

Davis, Steven. *Pragmatics*, Oxford: Oxford UniversityPress.

Hammond, Michael and Michael Noonan (eds). 1988. *Theoretical Morphology* (*Approches in Modern Linguistics*) San Diego: Academic Press.

Jespersen, Otto. 1922. *Language*. London: George Allen & Unwin.

Karimata, Shigehisa (狩俣繁久). 1999.「危機に瀕する琉球語諸方言」月刊『言語』28 巻 11 号 東京：大修館.

Katamba, Francis. 1994. *English Words*. London & New York: Routledge.

Kiefer, Ferenc. 1998. "Morphology and Pragmatics" *in Spencer & Zwicky* (*1998*). Oxford: Blackwell.

Lapointe, Steven G., Diane K. Brentari and Patrick M. Farrell.1998. *Morphology and Its Relation to Phonology and Syntax*, Stanford: CSLI Publications.

Levinson, Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press

Morimoto, Tsutomu (森本勉). 1994.『オーストラリア英語辞典』東京：大修館.

Nishikawa, Morio. 1997. "Morphologization and Combining Form". *Memoirs of the Faculty of Education, Kumamoto University*, Vol. 46. pp. 207-223.

Nishikawa Morio (西川盛雄). 1998.「接頭辞形成と文法化現象」, 熊本大学教育学部紀要第 47 号（人文科学編), pp. 87-99.

Pinker, Steven. 1994. *The Language Instinct*. Penguin Books.

Pinker, Steven. 1997. *How the Mind Works*. New York: W. W. Norton Company.

Shimomiya, Tadao. 1979.「バスク語入門」. 東京：大修館書店.

Siegel, Dorothy. 1979. *Topics in English Morphology*. New York: Garland.

Spencer, Andrew. 1991. *Morphological Theory*. Oxford: Basil Blackwell.

Spencer Andrew, & Arnold M, Zwicky (eds.) 1998. *The Handbook of Morphology*. Oxford: Blackwell.

Vieth, Harald. 1986. *Fambai zvakanaka muZimbabwe*. Gweru: Mambo Press.

Weekley, Eric. 1952. *The English Language*. Tokyo: Seibido.

Wilson, Deidre and Dan Sperber. 1986. "Pragmatics and Modularity" in *Pragmatics* (ed. Steven Davis) Oxford: Oxford University Press.

Yagi, Katsumasa (八木克正). 1997. *An Introduction to English Linguistics*『英語学概論』. 東京：英宝社.